

いのりの焼き物  
藤原顕長の壺

原顕長の名を刻んだ壺や多数の文字入り陶片が、

国指定史跡『大アラコ古窯跡』(昔町)から出土しています。

藤原顕長は、1136年から1155年にかけて二度、三河の国司となった人物です。自分の任務地の「大アラコ窯」で、文字を刻ませ壺を作りました。

この壺は、山梨県南都町、静岡県三島市、神奈川県綾瀬市など富士山周辺で集中して発見されていることと、刻んだ銘文の分析から、一家の繁栄を願ったものの、当時盛んだった富士山信仰に関係するものだと考えられています。

素朴な見た目とは違い、人々の願いが詰まった壺で、その歴史は深く重いものでした。

このように、依頼した人物が特定できるうえ、その年代、製作意図まで分かり、さらに焼いた窯、埋められた場所まで分かるのはほぼ奇跡に近いものです。大アラコ古窯跡は、その価値が認められ、昭和46年に国の



大アラコ古窯跡の発掘

渥美窯は、斜面をトンネル状に掘って作った巨大な窯である。当時の人たちのエネルギーを感じることができる。(昭和40年大アラコ6号窯の調査の様子)

藤原顕長のいのりの壺



経筒外容器

国宝。朝熊山経ヶ峰経塚で出土。朝熊山山頂には伊勢神宮の禰宜が世の平安を願い、お経を埋めた経塚が作られている。(金剛證寺蔵)

史跡に指定されました。渥美窯では、人々の願いをこめた焼き物を多く焼いていました。経を収める筒、経文を彫った板、仏塔、仏像など、高度な仏教知識と技術がない限りできないものではありません。

「つわものども」に愛された焼き物

『夏草や兵どもが夢の跡』

世界遺産となった岩手県平泉、源義経が最期にくらしたとされる高館で、松尾芭蕉が藤原氏、源義経の弔いで詠んだ句とされています。

平泉はみちのくの豊富な資源をもとに、藤原氏三代で栄えた都で、戦いに疲れた人々を救うために仏教による平穏を目指した平和の都でもありました。国指定史跡『柳之御所遺跡』はこの藤原氏の館跡です。

発掘では、堀で囲まれた大型の建物、池などのほか、藤原氏が使った大量の焼き物が見つっています。特に中国産、渥美窯の焼き物が群を抜いて多く見つかっています。ここで藤原氏が豪華な宴会を催していたことが分かりました。儀式や宴会で使われていた最高級品は中国産の壺、次に渥美窯の絵文の壺でした。

渥美窯の壺はみちのくの豊富な資源で蓄えた経済力を満足させる高級品だったので。渥美窯の焼き物が見つかったことにより、藤原氏の焼き物に対するこだわりや、経済力の大きさを証明するばかりでなく、中世の経済力と焼き物の関係など当時の社会や文化のイメージを一新させたのでした。

源義経は元服後の4年間と、最期を平泉で過ごしました。義経も渥美窯の壺で酒を酌み交わしていたのかもしれない。

また、源頼朝が幕府を開いた鎌倉も、平泉の文化に影響され、寺の造営、都市計画を進めています。ここでも壺・甕を中心に渥美窯の焼き物が多く見つかっています。

さらに、平清盛が遷都したまぼろしの都、福原京の跡地とされる祇園遺跡(兵庫県神戸市)でも渥美の大甕が発見されています。